歌の周辺

うという点で仄かな罪の匂いがする。そう、日々の食事のこ切り花を活けることは犯罪ではないにせよ、生き物の命を奪てゆく。私が菊の命を奪ったのだ。といが湧く。まだ花は咲いているけれど、いずれ数日で枯れ思いが湧く。まだ花は咲いているけれど、いずれ数日で枯れ思いが湧く。まだ花は咲いているけれど、いずれ数日で枯れのえば菊の花を活ける時、茎のところを鋏で切って、コップ例えば菊の花を活ける時、茎のところを鋏で切って、コップ

思って、この歌を作った。

となどを考えると、人間は重罪人……誰でも思うことを私も

(高野公彦)



(写真・木畑紀子)

高野公彦うた紀行・24

生 くること仄 か に罪を帯びたりとコ

ッ

プ

に挿しし花の茎み

ゆ

『汽水の光』

響いている。 世界の静けさ。生きている作者の心音だけが という独白。「仄かに」であるからこそ、真 の一つか。コップの水の冷たさと、この精神 ことのない茎の緑。茎を切って挿すことも罪 くる。苦悩する人間が見るのは、罪を帯びる に罪を意識していることが生々しく伝わって ある己の心を直視する。罪を自覚してしまう 【鑑賞】この時、作者は「暗きかたまり」で

(斉藤



ふるさとコレクション---195

高松の池 (岩手県盛岡市)

高松の池は盛岡市の北部、盛岡駅から約3キロの位置にある。もとは南部26代藩主信直公が湿地帯であったこの地区に治水を目的として築いた三段の堤防に始まる。最も大きかった中堤が高松の池として今に残っているのである。

高松の池は春は桜の名所、冬は白鳥の飛来地として知られるが、夏の青葉、秋の紅葉も美しく1年を通じて楽しめる場所である。池を一周できる約1.4キロの遊歩道には朝早くから夕方まで思い思いに散歩する人、ジョギングをする人の姿が見かけられる。近くの市立図書館やバラ園を訪れた人が休憩したり、昼食を広げたりできるベンチもある。

冬の高松の池の魅力は白鳥である。この冬の白鳥の飛来は10月中旬が初めだったが、多いときで200羽が飛来し4月ころまで越冬するそうである。餌をやる人、写真を撮る人、眺める人、遠来の客白鳥を歓迎する方法はそれぞれだが、高松の池が盛岡市民にいちばんなじんでいると思うのがこの季節だ。お天気がよければ池の遠景に岩手山がくっきりと見えるはずである。

(写真・解説:吉田 史子)